

---

# とある番外の超能力者

五之瀬キノン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある番外の超能力者

### 【ISBN】

N8542V

### 【作者名】

五之瀬キノン

### 【あらすじ】

学園都市にはLEVEL5が八人いた。しかし、その内の一人だけは非公式。その一人が繰り広げる波乱万丈な日々。これはそんなお話。

活動報告に連載予定だった物を変更してこちらに連載しました。

完全完璧なるクロスモノです。

嫌な人は回れ右！

感想等是非ともよろしくお願いします！

## 第1話

### “学園都市”

東京都の西半分を開拓して作られた超未来最先端都市で、人口二三万人。内、学生がその八割を占める。

スローガンは“神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの”。技術は他を圧倒的に凌駕し、平民が憧れるであろう“超能力”なるものが存在する。

その“超能力”は内容によって大きく六つに分けられる。

無能力者、LEVEL 0。  
低能力者、LEVEL 1。  
異能力者、LEVEL 2。  
強能力者、LEVEL 3。  
大能力者、LEVEL 4。  
超能力者、LEVEL 5。

そして、未開であり、未だ存在しない、

絶対能力者、LEVEL 6。

日々の能力開発と共に先を目指すこの、

“学園都市”とはそういう所だ。

「手は腰密着まっすぐ突き出す～っと」

歩道を歩きながら茶髪の短髪学生は空手の突きの真似、ではなく練習をする。

腕の動きやキレを見ればかなりの実力者であることがわかる。

「およ？ あれはレータじゃないかい？」

彼の歩く視線の先。丁度コンビニから缶コーヒーを袋二つぱいに詰めた通称レータと呼ばれる白髪の男が出てきた。

「…………」どうかしらぬかしらぬかの言葉を出しが俺クオリティー」

なんとも迷惑なクオリティーである。

早速彼は行動を開始。音を立てないようにソリソリ近づき、

「レーター一本もいらつせー。」

袋内のコーヒーを一本スル。いきなり報告しながら盗るのもどうかと思うが。

「ツ、またテメハカこのクソヤロオー。」

「ハッハー！ ザマミルーイ！」

「ロロス！」

「わーお怖いね怖いねえ！」

盗った後はとにかく全力疾走。

後ろから文字通り低空飛行で飛んでくる通称レータから逃げる。

「うわちだ」

「逃がすかよオー！」

通称レータは相当頭に来てるやつ。

それもやうだ。会う度に毎回毎回あいつかいを出されでは逃げら

れてしまつのだ。もつたまつたモノじゃない。

「テメハコつまでやりせる氣だ破咲イ！」

トーンと軽い様子で優々と建物五階分の高さまで一息にジャンプした彼、破咲 雷刃に向かつて通称レータ、一方通行は叫ぶ。

「油断し過ぎちゃうんかなあ、レータ？」

「五月蠅エ！」

外面上楽しそうな（？）やり取りをしている一人だが蓋を開ければあら大変な状態。

雷刃は地面から屋根へ仕掛けもナシに一つ飛びしたり垂直な壁を支えもナシに脚力のみで駆け上がつたり。追いかける一方通行も脚力や風の向きを操りつつ二人してアクションスター真っ青のアクロバティク過ぎるリアル鬼ごっこをしているのだ。

一人が高速で通過した通りはだいたいが荒れているのである。

「ヒヤッホオオオオオオオオオオオウツツツ……！」

現に、雷刃は一メートルはあるビルの壁を自動車並かそれ以上のスピードで走っているのだ。息切れ一つすることなく。

「そういや「一ヒーの味は、つと……ングッ……苦シ……」

『無糖の濃い味わいブレンド』

ラベルにはマニアからは血をつな字で、普通のから見れば苦そうな字でそう書かれていた。

「お前にいつもこんな飲んでたのかッ？！」

「ンなモンまだに決まつてんだろうが…」

取り敢えず勿体ないので苦い中身は全部喉に通した。

「つーかいつまでやる気だよ？！」

「テメエを殺るまで止めるワケねエだろうが！」

いつになく本気のレータさん、と悲鳴なんか愚痴なんか独り言なのがわからないことを言いながら走り続ける。

「ああもう！ 疲れんだろうが！」

「その台詞そのまま返してやらア…」

ビルの屋上を折り返して今度は真下へと真っ逆さまに。

一方通行の場合は本当に真っ逆さままま落下だが、雷刃は壁を蹴つて更に速くなっている為に少しづつ差が開き始める。

「このチートが！」

「そりやオメエだろうよレータ！ LEVEL5の俺でもお前よりもるんだよ！」

「言い訳すンな四下ア！」

「まさかのワンランクダウン！？」

LEVEL5の超能力者は“学園都市”内にも形式な表上七人しか存在しない。

LEVEL5の基準は“単独で軍隊とやり合える”ぐらいのことを言う。つまり、一方通行は勿論、雷刃も一人で軍隊を相手に出来るだけの力があるのだ。

しかし、彼は第一位でも第二位でも第三位でも第四位でも第五位でも第六位でも第七位でもない。

彼の順位は事実上あつたとしても存在しないのだ。

何故か？ それは、**一方通行**と並ぶからだ。  
一方通行の能力、あらゆるモノの向ベクトルきを自由に思つがままに操る  
『**一方通行**』。

それを匹敵、もしくは凌駕する能力を破咲 雷刃は所持している  
のだ。

“学園都市”第 位『**活力獨裁**』。“力”的全てをその支配下に置き、“力”に関する概念ならばどんなことでも、増幅減少何でも出来る。

それが破咲 雷刃の能力であり、**一方通行**に並び立つ理由である。

一方通行より一足速く地面に着いた雷刃は着地した際に足に溜まるエネルギーを増幅。地面を蹴り全てのエネルギーを前への前進エネルギーに変換して弾丸の如く駆ける。

普通なら人体が耐えられるような速度ではないが、人体にかかる負担を“**負担**”という概念に置き換えてそれをゼロにしてしまえば体は壊れることなく動かすことが出来るのだ。

一方通行の場合は自らの周りに“反射”的膜を張っている為風の反動などを受けなくなっている。

ピリリリリリリリリ、ピリリリリリリリリ。

路地裏を駆け抜け曲がり角を通過した頃、雷刃の携帯が音を立てた。

「あいあい、なんすかね吉川桔梗殿」

『相変わらずよくわからない口調ね』

電話の相手は研究員の吉川桔梗。口調からして面識があるのが窺える。

「んま、それが俺クオリティーってヤツですか」

『そつ、なら良いけど……アナタ、また一方通行アキセラレータと何かやらかしたの?』

「おお、鋭いつすねえ。今絶賛リアル鬼ゴジラの中なんですね」

電話の向むこうから『ハア……』といつ重い溜息が聞きこえる。今頃頭を抱えているに違たない。

『……とにかく、これ以上周囲に被害が出ないよう止めよう』  
警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントまで動き出してるみたいだから』

「ハンツ。そんなん雑魚なんて余裕つすよ」

『そうかもしだいけど、アナタはただでさえ非公式過ぎる存在なんだから少しほは自重しなさい』

「へいへい、ご忠告アドバイス一もです」

『…………』

「そんじや、また」

、

『…………』

通話を切つて携帯をポケットに押し込む。

もう一つしてくる内にもう川原にまで来た。

「…………ん?」

田を凝らして先をよく見ると茶髪の少女が川原を歩いていた。

今度はチラリと後ろを見る。

飛んでくる一方通行<sup>アクセラレータ</sup>。その手には石<sup>ペクトル</sup>が数個握られていた。推測するに、恐らく奴は石の向きを変えて弾き飛ばして来るだろ？

別に雷刃は石に対して恐怖は微塵もない。石がどれほど威力を持つていようと石の持つエネルギーをゼロに変換してしまえば問題はないのだ。

ただ、周りに被害が出るのが雷刃の恐怖となってしまう。仮に石<sup>アクセラレータ</sup>が飛び、エネルギー変換が間に合わず周りの部外者に当たってしまえば、一方通行のことだ、被害者は死を免れることは不可能。

「チイツ、お嬢ちゃん失礼！」

まずは避難させるのが先と見て歩いていた女子生徒を抱き上げて再び入り組んだ路地裏へと突っ込んだ。

「ちょ、アンタ…誰よ…ヘンタイ！」

「耳元でウツセえよ！死にたくないやしづら大入しくしてろー！あと一秒で安全なトコ置いてくから！」

「何よ偉そうにこのドヘンタイ！私『超電磁砲』よ！少なくともアンタよりは強いだろうし…」

「アホか！第三位程度が第一位に勝てるとでも思ってんのか？！」

「はあッ！？第一位つて…え、嘘ツ！？」

「わかつたら口閉じろ…舌噛みたくなかったらな…」

恐ろしい程のコーナーリングで直角に曲がり続ける。

「…ひし、ここならオーケー」

後ろを確認するがまだ一方通行の姿はまだ見えない。

急いでお姫様だつこしていた少女を下ろしてすぐに駆け出す準備

をする。

「ちょい待ち！ 質問！」

「アア！？ 僕マジで時間ねえんだけど！」

その場で細かく足踏みしながら少女をジトツと睨む。それでも無視しない辺りは親切である。

「アンタ アクセラレータ一方通行とどう言つた関係なの？！ 走る速度も普通じゃないし、一体何の能力者？！ もしかして『LEVELE5？！』

「ええい、質問が多い！ 一、俺は アクセラレータ一方通行とは追い駆けっこするような間柄！ 二、俺の能力は口外禁止！ 三、『LEVELE5かどうかも口外禁止！ 以上！ ジャあな！』

早口に言い切つた後、雷刃はビルの屋上までジャンプ。そのまま消え去つた。

「……何よ、アイツ…… ッ！？」

雷刃の消えた真上を眺めていた。

と、そこを一瞬。殺氣と共に白い影が通り過ぎた。

背筋が凍るような殺氣だ。全身を寒気が襲い鳥肌が立つ。

「……な、なんなのよ、アイツ……」「

腕を擦りながら少女 御坂美琴は路地裏を歩きだした。



無いなら作れば良いとはよく言つたものだ。

例えば雷刃の場合、そこにアリ一匹が足を一步踏み出す程度のエネルギーがあれば、都市一つを一瞬で崩壊させるほどのエネルギーにまで増幅が可能になる。つまり、僅かなエネルギーがあれば彼はなんでも出来る訳だ。

彼が指を微かに動かして出来た風であつても、ビル一つ吹き飛ばす竜巻を生み出すなど造作も無いこと。

彼はLEVEL5を超越していると言つても過言ではない。が、まだLEVEL6の人外に到達した訳ではない。

彼の場合、少しでもそこにエネルギーが無ければ何も出来ないのだ。つまり、何もしないでエネルギーを生み出さない限り、彼はただの“学園都市”の人間でしかないのだ。

例えば、一方通行が“向き”的<sup>エネルギー</sup>の存在しないものを操れないようになり、雷刃も“力”が無い限り何も力は無いということになる。

「……何よ、この情報量……」

御坂美琴は表示された情報量に目を疑つた。

“学園都市”的データベースをハッキングして出したソレはとにかく異常だった。

全データの九割九分九厘がダミーデータにより完全に隠蔽されておりデータの取得が全く出来ないので。

どれが本物でどれが偽物なのか。今までに様々なデータベースを見てきたが、今回は異常過ぎた。数兆TBで済まされるようなモノではない。

侵入した研究施設内のコンピュータもあまりの情報量にオーバーヒートで停止してしまい、施設内全ての電気が止まった。

「ああもう！　ここもダメなの！？」

美琴は壁を勢いよく蹴った後、研究施設を急いで脱出した。  
彼女の蹴った場所は焦げて凹んでいた。

\* \* \* \*

「…………で、不幸中の幸いってヤツね」

粗方の研究施設を回つた美琴は安堵した表情で夜の学園都市を歩いていた。

結局、破咲雷刃の情報は皆無に等しい程度しかわからなかつた。  
わかつたのは、彼が“破咲雷刃”という人物であり、『<sup>ヒナジー</sup>アウト活力独裁』のLEVEL5であるということのみであつた。

橋を渡りつつ、彼ともう一人の人物のことを考える。

謎のLEVEL5と第一位のLEVEL5。彼の言っていた『追いかけっこをするような間柄』は数回だけ会ったような仲ではないはずだ。

「いけないねえ。少女の夜歩きなんて、恰好の餌食だ」

と、不意に真上から一人の男の声。同時に微量の、殺氣。

「誰!」

反射的に敵とみなして雷撃の槍を飛ばす。が、それは男にぶつかった瞬間に霧散するように消えた。

「無駄無駄。とゆーか別に敵とかじゃねーよ」

よつ、と鉄橋の上に乗っていた人物が静かに、

バゴン!

.....着地せずに足下にクレーターを作った。

「ありや、ミスった」

「ツ、アンタこの前の!」

降りてきた人物。

茶短髪、白のチノに青いTシャツ、紫のスニーカーを履いた破咲雷刃だった。

「しつかし、よく単独で研究施設なんかで弄んでたな」

「なッなんで知つてゐるのよ！？」

「カマかけた……じゃなくて、尾行させてもひつた

「尾行つて……」

「そんで、盗み見たのが『シスターズ妹達』

「ツー？」

何故わかる。あれは完全に秘密にしなければならないモノのである筈。

「アンタ、施設内にまでついてきてた訳！？」

「イエス……だつたらどうするよ？」「

「……ヘンタイ……！」

「そつちに行き着くかいこの穰ちゃんは……」

シリアルは続かないらしい……。

「……まあ取り敢えずな。あんまりそれに関わるのはあんまりオスメ出来ねえんだわな」

「オススメつて……これはアタシの勝手でしょ！？」

「……俺は遠回しに死にたくなきや止めとけつづてんだが？」「死つて……い、いくらなんでも、大袈裟よ！」

おかしいだる。

そう喚く美琴に雷刃は面倒くさそうに言った。

「……お前は、学園都市第一位や第二位。それに俺にも勝てるか？」

その言葉に今までずっと口を開いていた美琴が黙り込む。

「お前なら、軽く俺のことも調べたんだろ？『ヒナジーアウト活力独裁』のこと

「も

「調べて、何か悪い?」

「……悪くは、ない」

ふう、と溜息を吐き、躊躇いを体から絞りだす。

「……ただ、それが身を滅ぼす。学園都市の“闇”。踏み入れようとなれば、全力で防ぐ。最悪は暗殺だ。俺はこうして“闇”に踏み入れそうな奴を見過すことなど出来ない。お前なら尚更だ」

彼は美琴を止めている。この“闇”がどれだけ危険であるかを彼は語るのだ。

「俺自体が、学園都市の“闇”だ。お前が手を付けた一つの“闇”

指を一本出し、一本を折る。

「『超電磁砲』<sup>レールガン</sup>量産計画『妹達』<sup>システムズ</sup>」

更にもう一つ、

「“存在しない八人目”『EVE』<sup>5</sup>『破咲雷刃』」

学園都市の裏に眠る“闇”。それはあまりに強大過ぎる。

「どうする?」

その選択肢。

学園都市の“闇”に止められるか。

そのまま学園都市の『EVE』<sup>5</sup>のお嬢様として生きるか。

学園都市の“闇”に染まるか。

「……アンタ、」

メリットは一つ。

デメリットは、二つ。

「まだ何か知ってる口振りね」

だが、デメリットの中に、一つのメリットがある。

「私が勝つたら、洗い浚い全部吐いて貰える?..」  
パチパチッ、と手から青白い光が迸る。

「それが死に直結するとしても?..」

それは、“闇”からの最終確認。もつ後戻りの出来ない地獄である。彼は言っているのだ。

でも、

「もう決まってる」

ポケットからコインを三つ取出して真上に放る。

「だから、全力で行くわよー!..」

「ドドンンンンンンツ!! と。

連續して三つの超電磁砲レールガンが放たれた。

「 なら、」

が、超電磁砲は雷刃を擦めるように飛んで消えた。  
レールガン

雷刃の能力ではない。単純にワザと美琴が逸らしたのだ。

「俺を超えられるか?」

今度はこつちの番とばかりに指を鳴らす。

パン!

「い、ツ!」

刹那に耳のすぐ真横を大音量の衝撃が駆け抜けた。  
脳が揺れ、鼓膜が破れるようなことは無かつたが、三半規管がや  
られた。

グラッと視界が揺れるが膝に手を付き倒れるのだけは防ぐ。

「おいおいへばりが早いぜい。こんな全力の億万分の一以下だ」

『活力独裁』<sup>ハナジーアクス</sup>。エネルギーをいくらでも増減可能な能力である。  
今は単純にエネルギーを増幅させて飛ばしたに過ぎないのだ。

「さて、学園都市第三位『超電磁砲』御坂美琴。全力で来い。闇に  
染まりたくば、俺を超える!」

彼がサツと手を振る。その微風だけで竜巻並の暴風が生まれる。  
風力の増幅。

「……言わせてもらえば、俺は学園都市第一位にも勝てる」

竜巻が力タチを変え、砲撃のよつに迫る。  
さして太い訳でもない。

横に避けて雷撃。音速を超える攻撃だ。予測してない限り避けれない。当たったとしても、美琴はあまり効果は期待してなかつた。何故なら、ついさつきのあの光景を見たからだ。

“ アイツ ” みたいに触れただけで能力が無効化されてしまうのを。

その期待は決して裏切ることはなかつた。

確かに槍は雷刃の腹へと直撃したのだが、消えた。そして、雷刃も気にした様子もない。

電気エネルギーをゼロに変換したのだ。

「第三位がいくら頑張りうつと、その差は異常なぐらいにデカい」

「ボォンンンンッ！－ど。再び音の衝撃。

今度はあばらを擦る。中身がグラグラと揺さ振られて肺にも例外なく震動が伝わり、否が応でもむせてしまひ。

「無様過ぎるぞ。俺はまだ一歩も動いてないし、全力本氣でもない。このままじゃ第三位の名が恥となるぞ？」

ガンシ、ゴンシ、と美琴の傍らのコンクリートが弾ける。音の弾は美琴を擦るように飛来してくる。

彼は遊んでいたのだ。当てようと思えばいつでも当てられる。でも、当てない。

あんなモノを生身に喰らえば、致命傷は確定だ。

だから、当てない。

彼女はまだ充分に引き返せるか。ひ。

「なら、今すぐ出させるまでー。」

「コインを一枚。次は、外さない。  
ドンッ！ と超電磁砲レールガンが放たれ、雷刃の腹のど真ん中に当たった。

「…………」

しかし、それだけ。当たつただけ。触れただけ。

「コインは“力”を全て失い、重力に引かれて地面へと落ちた。

「まだ……ッ！」

バリバリバリイイツッ－－－！

超高電圧の雷を生み出し、当てる。

「そうだ、あがらえ……もつと」

しかし、それすらも電力をゼロにされて無効になる。

猛攻は続く。



### 第3話

「……ムフフ……」

とある常盤台の女子寮一室。

チャパーツ（茶髪）のツインテール少女、白井黒子が手をワキワキさせつつアブナイ笑顔でベッドへと歩み寄っていた。  
目的は簡単。

現在進行形で寝て居る美琴を襲う為だ。

「お姉さまー！」

ガバッと窓中に踊りだしひビッドヘダイビングを慣行。そしてそこへいつものように美琴の拳が  
ぱふっ。

「おおー……？」

飛んでくる」とはなく、黒子はそのまま美琴の寝て居るベッドダ  
イビングを成功させてしまった。

「…………」「…………

いつもの美琴であれば、「寄るな変態……」など言つて肉体言語で拒否する筈。

しかし、今回はそれが全く無い。しかも、こうして黒子が混乱して抱き付いているとしてもアクションを起しかつとしていない。

…………「……」これは、詰んだ。本能は無情に告げた。

「す、すすすスミマセンでしたお姉さまあ……お許しを、お許しを～～～シッ！……！」

「…………うつむきいわねえ……、黒子お、今日は眞面目に勘弁して……」

今氣分ゲロ悪い……」

「ヒヤツ？！　たたた大変です！　医務官！　医務官まだいのですー？」

朝の常盤台は騒がしかつた。

\* \* \* \*

上条当麻はこの上なく不幸な男子高校生である。

『イマジンブレイカ』  
『幻想殺し』の右手を持つ彼は今日も今日とて不幸な一日に見舞

われてしまった。

安売りしていた卵パックを落として全滅させたり、ガムと犬のフンを同時に踏んだり、居候シスターが飲み物を溢してしまい忘れた二円札をふにやふにやの使い物にならなくしたりと、とにかく誰が見ても御愁傷様ですとしか言えない日を過ごしたのだった。色々とシツツミジニのある地の文だが今はスルーしておいてほしい。

「不幸だ……」

「言つたな。俺にまで不幸が移る」

自棄になつた当麻は散歩しようと夜の学園都市へ。  
そこで偶々友人の破咲雷刃にまた会つて二人は一緒に歩いていた。

「お前、その右手も宝の持ち腐れだよな。神様の奇跡システムたる幸運を問答無用で消すんだもんな?」

「言わぬいでくれ……かみじょーさんのライフルはもうゼロなんだ……」

「大分重症のようだ。

一番の原因はやはり二

円か。

「……つーかお前まだ二円持つてたんだ」

「なんでだろうな……ハア……」

「……溜息吐くと幸せが逃げるつづけど、お前の溜息には幸せが既に無いな……」

見てる雷刃自身が悲しくなってきたのだった。

「……当麻。強く、生きてくれ」

「ああ。我が友よ」

何故かは知らない。二人の絆は強かつた。

### 第3話（後書き）

次話より本格的に始まるよ！

アクセロリータがいつチョーカーなつたとかのツッコミはなしだよ？

キーワードには『時系列滅茶苦茶』ってあるから！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8542v/>

---

とある番外の超能力者

2011年11月11日12時32分発行